

その日は皆思ひきつて話もせず奥齒に物の挟まつた様な氣分で別れて了つた。老人とおけんとは兄弟が歸つてから、只黙つて居た。

二日程して息子は老人宛に手紙を寄せた。そして手紙が返送されて了つた事と、尙又行方を捜して居ると云ふ事が書かれてあつた。それを讀んで老人は黙つてその手紙を焚いて了つた。若い者共のする事はこんな結果になるだらうと腹立たしい輕侮の心持ちに混じて、おけんと話したらば嘸氣を落すだらうと云ふ憐れみの情が心に満ちた。さう思つて居る中に、フトあの縁談は初めから造り事で子供達が寄つて老人をだまして居たのではないかと疑ひ出した。自分がかうして一人不便の所に暮して居るのが若い者共には都合が悪いので、自分を息子の所へ招ぶための方便であつたのかも知れない。恐らくさうであらうと思ひつめて、おけんを呼んで話さうと思つたが、おけんだけはそんな惡だくみをする女でなからうと思つて一人考へて居た。

翌日姉がおけんの手紙をよこした。そして又同様な事が書いてあつたが、縁口はいくらもあるから氣を落すには及ばぬと、姉らしいなく、さめが書き添へてあつた。おけんはそれを見るや否や

ホロ／＼と泣き出した。そしてやる瀬ない口惜しさに追ひ立てられて、老人の所へ走つた。老人は炬燵に寄つて假寝をして居たが、人の來る物音に起き上つた。その老人の頸におけんはしがみついて聲を立て、泣いた。老人はおけんを前に引き寄せて、その黒髪をなでながら老の涙を浮べて黙念として居た。おけんの氣の沈まつた時、老人は初めて聲を出した。

「ウン、お前にも知らせが來たか、本當に氣の毒な事じゃ、がもう泣くな、わしも淋しいお前も悲しかろ、泣け／＼わしも泣くぞ……」

かう云つて老人も、しのび泣きに泣いた。

二人は小半時も泣いて居たが、淋しさ悲しさが涙で流れ去つた時、涙も拭はぬ眼を見合つた。そしておけんが一寸笑つた時、老人は大聲を出してワハハと笑つた。

「二人して泣いたわい。さつぱりしたわい。だがのおけん、これは氣をつけなくてはならんぞ、どうも先頃から奇體の事が續く様じゃ。一先づ二人して町の家へ暫らく行く方がいゝらしいわ

51

おけんは之れをきいて、ゾツとした、狐のお産と云ひ、此度の事と云ひ誠に奇怪の事である。



「お父さん、さうしませう。今からでもいよでせう、直に兄さんの所へ行きませう」  
 「そうするか。まだ日は高い、留守は爲吉に頼めばよかる、お前も用意してな」  
 二人は正月も松の内のまだ十五日前であつたのに、家を出て町迄急いだのであつた。村の子は又老人を見て「丸るいく」と初めたが、彼等二人はそれを耳にもがけず急いで町に去つた。

大正五年正月七日 讀了

昭和四年六月九日 讀了  
 暗い夜に燈二つ  
 新館の書架の隅に  
 やかまゝ  
 H.M.

### 蠟燭の灯

丸山皎齋老は眞暗の室に獨りジツと坐つて居る。どの位の廣さの部屋なのか一疊敷きに居るのやら百疊敷の石牢の中に居るのやら誰にも分らぬ。只遠くボンヤリと蠟燭が燃て居るその光が見えるが、その明るさは丸山老の居る所迄達して來ぬ。  
 何の音もしない、十日來一年來將又百年來何の音もせぬらしい。遠く萬里を離れた所に鼠の走る音がしたが、その音は丸山老の居る所迄達して來ぬ。  
 世界を領した暗黒千古を通じた寂寞の間に聲が起る。  
 「せがれの氣の迷ひには何か譯があるのかも知れん」  
 その一聯の言葉が終つた時、その一聯の言葉が同時に發せられた様な雜然たる音になつて丸山

老の耳に歸つて来る。

「誰が今物を言つたのだ」

その言葉尻が又雑然と暗黒の中に反響する。

「物を云つてはいけない、黙つて考へろ」

室が段々明るくなつて来る。何時間何年の後であつたか分らぬが、丸山老の周囲は既に明るい天日の光に満たされて居た。彼の前には彼の總領息子が眞青の顔をして坐つて居る。

「それでいゝではないか、恥づるには及ばん。死にたい人間は死なせて差支ない」

「けれど死にさうになつてから生きたくなつたらばどうします」

「生かさなくてはならん」

「分りました。とにかくやつて見ます」

息子はカバンを持つて往來に出た。

俺はかう云ふ事を知つて居る。丸山老のせがれが醫者として行つた事である。一人の女が死に

たかつたのである。四十近い女であるが丸山醫師と對座して居た。

「先生私は死にたいのです結局死ぬ私ですから死ぬ様にして戴だきたいと思つてお願いに上りました。どうか助けて下さい」

「そんな事は出来ない、誰か外の人に頼んで貰ひたい」

「私は初めて此の願を先生に打明けたのです。今から外のお醫者にそれを頼めば、二人の人に私の秘密を話す事になります。かう云ふ秘密はたつた一人の先生にしか打明けられません。先生はそのたつた一人の先生になつたのですからどうか御願ひ致します」

「困つたなア」

「お困りの事はお察しします、けれども私は尙困つて居ます、どうか私を救つて下さいまし」

戸外は秋雨がシト／＼と降つて居る、遠くお寺を借りて二日目を打つて居る梅坊主一行の囃子が此の小驛に稀れなにぎやかさを運ぶ。

「一體どう云ふ事情なのですか、譯を話して貰はにや私も何とも御相談にのれませんか」

「事情は先生が私の願をきいて下さらなけりや御話してきません。御承知下さいますなら御話も

致しますが……」

「事情によつては何とか外に私で方法がつくかも知れんから」

「いゝえ外には道がありません。今度此の巡業に出る時から私は覺悟して居ましたのですから、今更ら外に方法などありはしません」

「あなたの様に一本調子じゃ困る」

「お困りでも私がかうして一度お願いした限りはだうしても承知して戴かなくては私はこゝを動きません」

「そんな減茶な事を云つたつても困る」

丸山醫師は當惑して黙つて了つた。

此の小驛の秋は蕭條の秋であつた。霜が下りるに先立つて朝霧夕霧が野から森から山から湧いて、日中も築地のくづれに障子の隅に馬追が鳴いた。野の仕事を終へた近村の農夫は冬籠りの買出しに町に出て来るが、盆踊りが過ぎて了つてからは何の楽しみも町には得られなかつた。只稀

に町の天狗連が秋の夜のつれづれを寄つて催す浪花節の素人大會に村の若い衆が集つて来るに過ぎぬ小驛の秋であつた。

それを今年梅坊主一行が初御目見えに此の町に来て、お寺の本堂を借りて三日間打つと云ふので町中や近村は大變な評判であつたのである。一行がつく一週間前から町の辻々には「梅坊主一行来る」のビラが派手に貼られて人々は専らその評判をして居た。若い娘の五六人がハットセを踊る手取り足並みが艶めかしくビラの上に寫眞で出て、梅坊主以下梅之丞、梅助、講談師大山雷助、山本家花子の獨演など、盛り澤山なので町の料理屋などもお酌の小娘を借りて當夜の用意をした程である。

町廻りに十五六人の連中が荷馬車二臺に分乗して町から村へと口上をのべて歩いた時、町人村人はもう夢中になつて了つた。此の町廻りに梅之丞が口上をのべながら足をふみはづして荷馬車の上のむしろから落ちて一寸したすりむき傷をした時、梅之丞は丸山醫師に頼んで繃帯をして貰つたのである。そのお禮心で一行は五枚の札を丸山醫師に進呈した。

初めの夜丸山君は此の札で酸齋老を大將にして娘のおけんおけんと細君と小娘とをつれて梅坊主の見

物に行つた。今時の入場料の三十銭は安いものであつたので、お寺の本堂はあふれ出す程の大入で、お寺の坊さんは思はぬみ入りにホク／＼もので、庫裡の家根の葺き替えの金が出来て檀家への無心に行きつまつて居た矢先きであつたので、佛壇迄も取り片づけて舞臺を造つたのであつた。

丸山醫師は一番前に出て次々と出る面白い出し物に書生をして居た頃の淺草を思ひ出して大喜びである。皎齋老も此の夜は殊の外機嫌がよくて頻りにおけんと話しながら見物して居たが、札をたゞで貰つた手前息子に話して二圓の祝儀を一行に送つた。中頃になつて本堂の柱に、

金二百圓也 丸山大先生

と貼り出された時老人は、

「ハハア二百兩になつたぞ、他愛のないものじやな」と大機嫌であつた。

庫裡は樂屋に使はれた、坊さんは若い娘が兩肌をぬいでお化粧をするのを隅の方でチビリ／＼

盃をなめながら見物して居た、大黒を二三年前になくなしてから、とかくの評判のあつた和尚は時ならぬ艶めかしいお白粉の香と、大鏡や派手な長袖などのだらしなく投げ捨てられた中で、一人ソワ／＼とそゝられながら無暗と酒を呑んで居た。弟子共の舞臺に出て居る留守を梅坊主は庫裡に残つて會計の算盤をハジいて居た。

「和尚さん助かりましたよ、本堂が拜借出来なけりや、わし共は困つて了ひましたよ、なアにお寺だつて公衆の娯樂に提供するのは今時じや當り前ですア、お寺だからつて、お線香臭いばかりが能じやないのだからね」

「さうとも／＼、師匠あなた方は面白おかしく世の中が渡れて美しいね」

「外で見る程じやありませんがね。何しろ大一座を連れてあるくと飯を食ふ口が多いので損をする心配ばかりだね」

「そうでげしよ、だが若い娘も居るし元氣な若い衆も居るし、面白い事でげしよ」

「それがね和尚さん、若い奴は仕様のねえものでホレるはれる、きれるつく、いやはやなか／＼世話の焼けるもので……」

「師匠どうだね、一盃やらないか」

「有難う、だがこれから深川をやらなくてはならぬえからね、何しろ年をとると息がきれて来てね、和尚さんも行ける口らしいね、はねてから一盃やりませう」

「じやはねてからにませうかな」

そこへドヤ／＼と五六人が幕合を歸つて来た、

「オイ花公一寸」

師匠は三味線方の花子を呼ぶ、四十近い女で恐ろしく肥つて居るが、若い娘共にはおどしのみきさうな海山千年である、師匠は花子をつれて庫裡の外へ出た。

庫裡の裏は桑畑が少し枯棒になつて立つて居て、秋の夜更けに馬追がないて居た。

「今夜はねて奴等を宿へ歸してから、お前と和尚と三人で庫裡で飲むから、酒と何か一寸取つて置けよ」

「お寺で飲むんですか」

「當り前よ、酒で一つ和尚をだまして、本堂の借り賃をまけさせるんだ」

「お寺で飲むのはひどいね」

「なアに随分生臭さうな和尚だぞ、和尚きかなかつたら手めえ又一寸だませよ」

「いやだね和尚なんか」

「和尚だつてかまうものか、だが手めえ又逆さにだまされるなよ」

「大丈夫だよ」

「若い奴共にや黙つてろよ」

二人は又庫裡に入った。

山本屋花子は眞夜の二時近く提灯を持った和尚と連れ立つて庫裡を出た。寝静つた小驛を所々に立つ家並に、夜霧は濃く下りて居て提灯の灯は丸く暈をきて居た。

「師匠は今夜寺にとめるから心配するにやあたらぬよ」

「和尚さん、師匠も年をとつてるから風邪でも引かせると困るからお願しますよ」

「大丈夫だ、酒もまだあるし。わしは一晩又呑み明すから布團は師匠に借すから大丈夫心配な

「さ」

「どうぞ」

「入りがよくて師匠も喜んでるね」

「えお蔭さまで、それはさうと和尚さんさつきの本堂のかり賃の方はどうかさうお願いします、大丈夫でせうね」

「いゝとも三日で三十圓なら不足はねえ、がもし金が案外とれたらもう十圓も足してくれる様に師匠に話してくれないか」

「話すことは話しますが、何しろ汽車のない所は旅費がかかるから、案外お金が出るので」

「それもさうだろ」

「二人は小さな宿屋の前に来た。」

「叩こか」

和尚は女を顧みた。

「私聲をかけて見ます、一寸お願ひ、今晚は」

聲は町を風に飛ばされて了ふ。

「駄目じや叩かう」

和尚はドン／＼戸を叩いた。

「今あける、師匠か」

内から聲がした。花子はその聲をきいて和尚に耳打ちした。

「梅之丞よ、和尚さんあなたは早く歸つて下さい、皆で私の事つて云ふと色々云ふから」

「さよか、拙僧はこれで歸る」

提灯はテク／＼と霧の中を歸る。

「花子か、馬鹿におそいな、夜遊びは降参だな。オヤ師匠はどうした」

「師匠はまだお寺よ」

「うそつくな、又師匠とどこかへしけ込んだな」

「うそよ梅之丞さん、ホントに師匠はお寺にねてるよ」

「そして花子一人歸つて来たのか」

「アイ」  
 「よく狐が化かさなかつたな、さア入つたく、戸を開けておかれちや寒くて仕方ねえ」  
 花子は戸の中に消えて、町は又淋しい。

話は此の山本家花子にからまる。丸山醫師に死の願をしたのは此の花子である。

カベンを持つて家を出た丸山醫師は小さな木賃宿の二階に昏々と眠る花子を訪ふた。その日の朝、丸山醫師から注射をうけた花子は宿に歸ると直にうす汚ない夜具の中にうづまつて居た。師匠がトン／＼と二階に上つて來た時花子がかすかに眼を開いた。

「又ふて寢をしてやがる、オイ花子」

師匠はかう云つて、花子の枕を足で蹴つた。

「起きろ」

「起きられません」

「何を云やがる、手めえ昨夜どうしやがつた。俺を寺にねこかして和尚とどこかへ行きやがつた

な」

花子は又眠る。

「まだ寢る積りで居やがる、起きろ、起きろつて云ふに」

目をテラとあけた女は黙つて師匠の顔を見た。

「私死にます」

「死ぬつて、死にたけりや死んで見る、それでどうしたつて云ふのだ」

「私毒を注射して貰ひました」

「おどかすない。その手を食ふか」

女は又目を閉じた。師匠は立つたまゝ花子の顔を見て居たが、ソツと頭に障つて見た。靜かに女は眠る。彼は二つの指で女の眼を明けて見た。ソツとして立ち上つた師匠は急いで梯子の上へ行く。

「誰か居ねえか、大變だ／＼」

「どうした／＼」



「ドヤ／＼と五六人の者が上つて来た。

「花子の奴様子が變だ、死ぬ毒を注射したつて事だ」

「大變だ」

「花子」

聲をきゝつけて上つて来た娘子は泣き聲を立てた。

「花子姉さん」

花子は昏々と眠つてゐる。

「早く醫者へ行け、一人は寺の和尚をつれて来い」

師匠がどなつた。かうして丸山醫師は花子の枕元に招かれたのであつた。丸山醫師は二階の梯子をギシ／＼と上つて来たが、そこに集る梅坊主一行を見て初めて来るべからざる所へ来たのを思つて、當惑の表情をして二階の上り口に立つて居る。

その時一人が丸山醫師を見出して聲を立てた。

「先生が見えたぞ、みんな枕元をどけ／＼」

師匠はその聲で後ろを振り向いた。

「先生ですか、此の阿魔が毒を注射して貰つたと云ふのです、どうぞ一つお願ひします」

丸山醫師は黙つて花子の枕元に坐つた、そして先づ石膏の様に白い花子の顔を見た。

「どうでせう、もう手遅れですか」

「こいつに死なれちや巡業も出来ねえ」

「只見て居ねえで何とかして下さい」

口々に云ふのを聞きながら醫者はまだ顔を見つめて居る。その時彼の顔には形容し難き不安が淨んだ。

「此の人は生きたいのでせうか」

誰も返事をするものがな。

「死にたい者なら死なせなくてはならん」

師匠の聲が此時丸山醫師にきこえた。

「ほんとに死ねる女ぢやねえのだ、今ぢや生きてがつてるに相違ねえ」

「證據がありますか、その」  
暫らく沈黙が続く。

「證據があつても今更ら仕方ない、駄目だ。もう助からぬ」

皆互に顔を見合せた。師匠はその時丸山醫師の傍へよつて行つて、花子の顔をのぞいた。彼女は死の静けさである。

「一體どこで注射をして貰つたのだ、誰か知らねえか」

「俺だ注射したのは」

丸山醫師がかう答へた時、一同は吃驚した。

「今朝来て死にたいと云ふし、死なゝくてはならんと云ふから、死ぬ様に注射したのだ」  
皆が丸山醫師を見つめた。

「俺は注射したくはなかつたが、注射しなくてはならぬ破目に落ちたのだ」

師匠が此時丸山醫師の耳下で嗚る。

「そんな事はどうでもいい、人を殺してそれで済むものでねえ、いくら醫者でも人殺しはよくね

え、何とかこれは生かして貰ひたい」

師匠の唇は紫色になつてブルブルふるえて居る。

「たしかに又生かしてもいいのか」

丸山醫師が落付いてかう云つた時後ろの方で小聲で「氣味の悪い醫者だなア」と云つたものがある。丸山醫師はカバンをあけて一つ／＼注射薬を検べて居たが、一つの瓶の薬を注射針に吸ひ入れて、それを右手に持つたまゝ師匠の顔を見つめた。丸山の顔は恐ろしい程眞面目である。

五分十分と時が過ぎる。

「たしかに又生かしてもいいのか」

丸山醫師が又かう云つた時、師匠の顔は眞青であつた。

「助かるものなら助けて下さる」

此れを聞いて丸山醫師は立ち上つて一同を見渡した。

「みんなそれでいいか、助けてもいいか」

誰も返事をするものがない。丸山醫師の顔にはかすかに微笑がたゞえふ。彼は坐る、そして花

子の手をアルコール綿で消毒し初めた。彼が注射を終つてその針をぬき去つた時、一同は長大息をした。丸山醫師は黙つて立つ、そして梯子をキシ／＼と下りて行つた。

「氣味の悪るい醫者だな」

「變な醫者だな」

「又毒を注射したのぢやねえか」

「何とも分らねえぞ」

彼等は口々に云つた。

うす暗い獨房に丸山醫師は眞青の顔をして坐つて居る。廣い野原の中の一つの檻の中の様に監獄の晝は静かである。彼は大分瘦せて居るが目のみは氣味悪るく光つて居る。

「俺が頼まれて注射をする時はあの女は是非死にたいと云つて居た。死な／＼してはならなかつたのだ。それを後になつて又生きたいと云つたのだ。特によると始めから死にたくなかつたのかも知れん。俺はだまされたのだ。自殺幫助と云ふ罪名が殺人未遂に變つたのを考へて見ると、あの

女は本氣でなく狂言自殺の積だつたのかも知れん。殺人未遂と云ふのだからあの女は生きて居るに相違な／＼」

獨房の中は段々暗くなる。シト／＼と雨が降つて來た。格子の外に妙にキラ／＼と光るものがある。見つめて居るとポヤ／＼と青白い火になる。

「狐火だ」

その火はフラ／＼と動く、又一つ所にジツと火が止まつた時、眞中に蠟燭が一本灯つて周圍に暈が十重二十重に五色の彩りを散らせる。その蠟燭の下におけんが針仕事をして居る。

「おけん、兄さんはどうした」

丸山峻齋老は聲を立てた。

「今往診ですよ」

「いつ牢から出て來たのだ」

「お父さん何を云つておいでるのでござす」

「もう牢に入つて二年近いな」

おけんはそのと立つて診察室へ行く、兄は患者の居らぬ室に何か本を見て居た。

「お父さんが又變です」

「そうか困つたなア、よく氣をつけてくれよ」

「私氣味が悪くて困ります」

兄は立つて老人の居間に入つた。

幾日の後か知らぬ。皎齋老は頸に小さな風呂敷包をまきつけて、田舎の畦道を歩るいて居た、父祖の頃からの蓼科山の峯はその日も雲にかくれて居たが、その雲の下には昨夜でも降つたのであらう、雪の足が五六本裾近く迄流れて居る。

皎齋老はフト立止まる、彼の後に茫として立つ影の向山一敏がある。それをめぐつて踊る姿の山本家花子、頬被りをした狐の嫁入の類が恐ろしくなめらかに動く。招く尾花も山村に枯れて、賣れ残りの夏蠶の繭を繰る音が遠くきこえる。満目の秋の末である。

## 揺籃

東京の初雪が降る。初雪にしては申分なく降つた。地上一尺近く夜の間に降り積つた雪に、市内の電車は朝の間全く運轉不能になつて居た。

本郷の赤門あたり學生がオーバーの襟を立て、長靴ゲートルの武装でにぎやかになつたのは既に正午近かつた。

解剖學教室の奥の實習室には今日から始まる解剖實習のために、學生等が七八十人集つて居た。彼等は新調の白衣をきて、解剖器具を小さな箱に入れて手に持ちながら、寒い廣い室の中に小聲で話しながら、教授の出て來るのを待つて居る。窓の外には雪が相變らず降つて居る。

四十何體の屍體が解剖臺の上に乗せられてその上には純白の巾が氣味悪くかけられて居る。

揺 籃

或る學生はその一つの屍體の上の布片に手をかけて、屍體の顔を一寸のぞいた。人間の屍體とも思はれぬ程に落ち凹んだ眼と頬とに、彼はゾツとして又遠く離れた。屍體、それも永くアルコールに漬けられて夏から冬を待ったその屍體の發する特有の香が室を満たして居る。

屍體解剖の實習は例年冬から始まつて春を待たで終る事になつて居る。一つの屍體に就いて解剖を永く続ける爲めには酷寒の候でなくては腐敗の心配があるので、特に冬がその實習時期であつた。室にはスチームも通つて居らぬのでオーバーをきたまゝその上に白衣をきて居る學生が多かつた。

白髪の教授は助手をつれて實習室に出て來る。學生は話をやめて教授の傍に集つた。

「今日から屍體に就いて解剖學の實習を始める。諸君は此の尙ぶべき屍體に對して極めて眞面目に實習をしなくてはならぬ。先づ今日からは筋肉學と血管學との實習に入るのである。各自配分された屍體の配分された部分に就いて十分の注意を以つて實習をする事を希望する。諸君の前にある屍體は云はゞ學問のための尙ぶべき犠牲である。若し不眞面目に不注意に諸君が之れに刀を加へる様な事があつては、その人々は死者に對する冒瀆であるのみならず、學者の良心を持たぬ

ものである……」

學生等は此の教授の言葉をきいて冷やりとする程緊張した。

助手が各學生に屍體の一部宛を配分した。そして學生等は白布の取り去られた屍體の前に立つて先づ解剖圖を擴げた。誰も刀を加へたものはまだない。

教授が高聲で話す。

「皆配分された部の筋肉と血管とを一體二週間で終る様にしなくてはならぬ。特に腹部を配分された者は内臓を同時に十分解剖するのである。分らぬ事は我等に聞く様にして」

教授は三四人の助手を顧みた。

「では君等よく教えてやつて呉れ給へ」

教授は室を去つた。まだ刀を運ぶ者がない。皆氣味悪るさうに屍體をながめたり、繪圖を見つめたりして居る。

揺 籃

俺はこの時スツと實習室に入つた。學生も助手も俺の來たのを知る筈ない。俺は一同を見渡し

た。學生等は無言の行を續けて居る。

學生等は仲間の誰かゞ刀を屍體の皮膚に加へたならば、眞似をしやうと思つて居るらしいが、その勇氣のある者は一人もない。學生等の中に特に一人目立つ男がある。彼は腦貧血でも起すのかと思はれる程眞青な顔をして居る。彼は顔面を配分されて居る。彼の前には顔面筋の解剖圖が擡げられてあるが、その圖と屍體の顔面とは甚だしく異なつて居た。屍體はまだうら若い女性であつた。他の屍體が永い間のアルコール漬けに物體の感じしか與へぬのに、この屍體はまだ新しい故であるか、黒髪が長く解剖臺からたれて、皮膚にはまだ弾力が残る様に思はれた。腺の白さに比うべき皮膚に胸のあたりは處女の乳房がもり上つて居た。

俺はその學生が餘り眞面目に苦しむ様子が見えたので、その傍に寄り添つた。その時ズツト奥に居る學生の一人の受持ちになつて居る下肢に助手が刀を加へた。

「早く初め給へ、ソナナにビク／＼するには及ばんよ」

助手の此の聲で一同はその方を見た。助手は笑ひながら皮膚をきつて居る。

此の様子を見た學生等は皆解剖刀を手に持ち始めた。或る者は腹部をきり初めた。ある學生は

屍體の足を持ち上げて足の裏をのぞき出した。

が俺の立つ前の女性の屍體の傍に立つ四人の學生はまだ刀もとらぬ。

「オイ山田、君が初めなくては駄目だよ、顔をきり出せば俺達も元氣が出るから」  
足の皮膚に障りながら一人が云ふ。顔面を配分された山田君はまだ黙つて居る。

俺は此の山田と云ふ學生が、此の解剖の實習にブツかつて醫者になるのを止めやうかと考へて居るのを知つた。彼は沁々醫者になるのがいやになつて了つたのだ。只感情の上で醫者になるのが嫌になつたのではあるが、此の様子ではホントに明日退學届を出すかも知れぬ程、此の屍體に刀を加へるのが苦しいのである。

俺は彼に早くやれと命令した。

殺人罪を犯す者の決心を以つて、山田は解剖刀を握つた。そして左の手で此の若い女の屍體の頬の皮膚をつまみ上げた。冷たい觸感が彼の指から背へ這ひ上る。

搖 「やるぞ」

山田は聲を立てた。四五人の學主が山田の手許を見た。山田は右の手に持つ刀を皮膚に近づけたが、その刀の尖はかすかにふるえて居る。が刀が皮膚に觸れたのを感じた時、彼の刀尖はグザと深く皮膚に押しこまれて、頬から下顎迄皮膚をきつた。「あゝ」

山田は聲を發する。きられた皮膚が口をあけてその下に褐色をした顔面筋が見えた。彼はその皮膚のきれ目に左手を入れて、皮膚と筋との間に刀をいれて、メリ／＼とはがし初めた。彼の額からポタ／＼と冷たい汗が流れた。山田は眩暈を感じて危うく後ろに倒れんとした。「意氣地なし奴」

彼は自ら吐つた。

「オイもういゝだらう、君等も始め給へ」

山田は自分の仲間を見て聲をかけた。その時には既に左足の皮膚はきられて居た。それを見た山田は續けて皮膚をきり續けた。

423

三十分後に山田は右半面の皮膚を筋肉から完全にはがして居た。既に若い女性は居らなかつた。只解剖實習の材料として一つの屍體があるのみであつた。

ザ／＼と窓の外から音がする、いつの間にか晴れた冬の雪後の戸外には、大陽が暖かくさして、雪解けの水が屋根から音を立てゝ落ちて居るのである。

山田は刀や鋏を冷たい水道の水で洗つて、それを箱に入れて、自分の手を石鹼で二三度洗つて室を出た。

俺は此の學生、醫者生活の搖籃に居る山田の身に興味を覺えて、彼に憑く氣になつた。十年は此の山田の身で俺は仕事をしたのである。

搖

日が暮れて又空は雪模様となつて、風さへ出て、本郷通りはマントやオーバーを頭からかぶつた學生より外には、まばらに役所歸りの人が通るのみである。

その冬の夜の街上を山田は一人歩いて居た。今日初めて試みた人體解剖の氣味悪るさが頭を

満たして居るのである。人類に刀を加へる事、然も治療の目的ではなく、只自分自身醫學の研究をするためのみの目的で、人類の屍體、然もうら若い處女の顔面に刀を加へて、その皮膚をはがして了つて、みにくいどす色にしつぷして來たその日の自分を考へると、沁々と自分の慘酷性を見せつけられた様に思はれて、不愉快で堪えられぬのである。

今日の自分は只一時も早く此の屍體となつて尙うら若い美しい處女を、滅茶苦茶に、きりきざんで、此の屍體が處女の屍體である事が分らぬ様にするために、前後の考もなく顔面の皮膚をはがして了つたのである。學問のための努力など毛頭心に浮ばなかつたのである。自分は屍體に對する胃潰をしたのである。卑怯千萬の行爲をしとげたのである。明日の午後も亦同じ心持ちで同じ行爲をしなくてはならぬのであるか。

山田はかう考へると不愉快でたまらなくなつた。フト見ると青木堂の前に自分は來て居るのを氣付いた。よし一つ強い酒を呑んでやれ、と自暴自棄の考に支配されて青木堂の店へ入つて階段を上つて二階の廣間に入つた。

廣間には往來に近いテーブルに二人の人がコーヒを呑んで居る外、人は見えなかつた。彼は

小聲でウキスキーを入れてコーヒをくれと命じて隅のテーブルに座をとつた。

戸外の寒風から急に暖かいストーブのある室に入つたため、顔面の皮膚が突然血行がよくなつて頬がほてつて來た。

何だつまらぬ事をくよくよく考へて居たものだ。どうせ死んで了つた者だ、それをきりきざんだつても何の胃潰に値するものか。一文のねうちもないセンチメンタリストが何になれる。世の中の奴等は生きて居る同類をもつと慘酷な目にあはせて平氣で居るじやないか。よし明日はあの高い鼻をきつてやらう。痛快だな。

山田は酒の香のするコーヒをキユツと呑み下した。あゝ天下は泰平だ。野たれ死にをした女が俺の解剖の材料になつたのだ。生きて居れば此世の惡の材料になるだけだ、死んだればこそ俺の研究の材料に出世したのだ。

「おゝ、キルシュを持つて來て呉れ」

山田は自分の聲のあまりに高かつたのに自ら驚ろいた。二人の客が山田を見た。山田も二人を見た。



「何だ君か」

山田はその二人の客の一人が自分と同じ屍體の足を解剖する學生であるのを知つたのである。「勇敢な聲を出すなア」

その學生は遠くから笑つた。

「今日の解剖が氣になるのでやけ呑みの形さ」

「何だ、度胸のない奴だな」

「君も大分降参して居たじやないか」

「ああ、小々降参した。でプラウトをつれて散歩だ」

山田は初めてその學生の連れを見た。十六七のまだ若い娘をその學生は連れて居た。山田はその學生に近づいた。娘は立つて恥かしげにお辭儀をした。

「やア僕は山田です」

娘はつゝましげに又禮をした。

「山田、解剖はあまりいゝ氣持しないな」

「うん。特にあゝ云ふ若いフラウはいけないよ。だが俺は明日あの高慢ちきな鼻をそり落して、それから齒を一本一本ギュー〜とぬいてやるのだ」

「ふうん。少々勇敢すぎるぜ。今も此奴と話して居たのだ、死ぬと解剖されるぞつて」

「さうだな。此の方と同じ位の年だらうよ、あの女は」

「死んでもなか〜美人じやないか」

「ああ」

「今日家へ歸つたら、臭いと云ふのだ。やつぱり臭いのだな」

「さうか。俺は下宿で夕飯にピフテキを珍らしく出したが、とう〜食へなかつたよ」

「さうだらうな。一寸色が筋肉と似て居るからな」

「あの解剖室から出る水はお池に入るのだらうぞ。だからあの池の鯉はよく肥つて居るよ。あれを食へば人食ひの譯だ」

「あはは。よつほど前の話だそうだが、上野の動物園の獅子が逃げ出したんだ。人間の匂ひをかぎながら、その頃は藪だらけの大學の構内に入つて来て、とう〜あの解剖室へ来て屍體を五ツ

六ツ失敬したんだ。所が何しろアルコール漬けになつて居るので、獅子もよつばらつて了つて、あの広い室で躍を躍つて居た。それを何か夜中に音がすると思つて、小使が恐る／＼窓からのぞいて見ると、ライオンがいゝ機嫌でカツボレを試みて居たので、小使君腰をぬかしたそうだ。「面白いな。それから俺が話さうか。そのライオン君、夜が白みかゝつて、上野の山へ歸らうとしたが、道が分からなくなちやつた。辛うじて大學の構内から不忍の池へ出る大きな土管を見つけて、その中へ頭からそろそろと入つたが、何分にも腹が膨脹して居るので入るには入つたが先へ出られなくなつちやつた。ライオン七十五日間日夜ウー／＼とうなりつゞけたまゝ死んださうだ。東京中へそのうなり聲がきこえたさうだ。小金井先生もこれには困りきつたさうだぜ」「まア」

娘さんが感心して聲を立てた。

俺の仕組んだ芝居である。山田と云ふ學生は案外純な心の持主である。時として俺の彼に及ばず影響のために、彼は脱線した心になり得るが、それは矢張り付焼及であつて、彼の本心はまだ

俺の影響を完全にうける域には達して居らぬ。茲にその夜俺の仕組んだ芝居を話して置く事にす

る。  
大理石の冷たい解剖臺がたつた一つ広い解剖實習室にある。大空からは氣味の悪い眞青な月光が此の一臺の大理石の解剖臺の上に光を降らせて居る。

山田は右の手にメスを持つて眞黒な着物をきて立つて居る。何の音もせぬ。

「持つて来い」

山田が大聲で嗚鳴る。遠く月光の届くかぎりの野の果てから、眞黒な影が四つ五つ動き出して、聲も立てずに山田の方へ近づいて来る。

此の黒い影の人々はあの世からの使ひである。彼等は一人の純白な處女の屍體を持つて来るのである。

黒い影が近づく。ザワ／＼と氣味の悪い衣づれの音がする。山田は左の手をのばして此の臺の上へと指圖をした。

裸體にされた一つの處女の屍體が、靜かに解剖臺の上に置かれる。此の屍體が臺の上に仰向きに置かれると、黒い影の人々はスツと消える様に遠のく。

「ははア、とう／＼死んだのか、一つ解剖してやらう」

山田の頬には一時笑の影がほのめく。その屍體はその日の夜青木堂の二階に居た、あの學生の許婚になつて居る娘の屍體である。

「あいつはまだ知らないのだらう。あいつの來ない間に此の顔をきりきざんでやらう」

山田は右の手のメスで一息きの間に屍體の鼻をそり落した。屍體の顔は全く變つて了つた。山田はやつとこの様な齒科の器械で屍體の齒を一本々々ぬき初めた。前齒が五六本ぬかれて、屍體の上下唇が口の中に落ち込む。

「よし。もう分るまじ」

山田は額の汗をぬぐつた。

「おおい、一寸待つてくれ」

かすれた聲が遠方からきこえる。その聲はあの學生の聲である。

山田はその聲をきいて、遠くの野の果てを見た。夜が明けるとかのほの／＼と空が明るくなつて月光はうすれて居る。

雪が降つて来る。目も鼻も雪にうまる程の粉雪が降つて来る。山田はその雪の中にまだジツと立つて居る。

「おおい。一寸待つて呉れ」

又聲がする。山田は輕侮の笑を洩らす。

「今頃になつてあの世から歸つて來たつて間にあはん。心中したのはもう十日も前じやないか。今頃來たつて間にあふものか」

山田は解剖臺を見た。雪が五六尺もいつの間にか積もつたので、もう屍體の上は平らの雪になつて居る。それのみでない。山田の腰迄既に雪にうもれて居る。

山田は足を動かして見た。一寸も動く事が出來ぬ。山田は狼狽して、解剖臺のふちに両手をかけて、雪の中から出るべく努力して見た。その努力は無駄に終る。

「おおい。一寸待つてくれ」

聲は既に二三間にせまつて居る。その時雪が彌々急に濃くなつて山田の胸迄も雪に埋もれて、解剖臺は雪の下にかくれて了つた。

「おい山田、どこに居るのだ」

その聲は既に山田の耳の上から聞えた。

「オヤ、居ないな。此の邊の筈だが」

此の聲がして二三分後、山田の頭には三十貫もある重みがかゝつて來た。山田は呼吸が出来なくなつた。

パツと天日がさす。山田は四方を見た。そこには春の花野があつた。やつと安心した山田の後ろから柔かの手が出て、山田の頸をしめつける。

「あア、くるし」

山田の聲をきいて笑つた女がある。若い聲である。眼を開いて見ると、鼻をそりおとして齒のない若い女が、山田の頸をしめつけて居る。

突如。山田の耳許で眼さまし時計が鳴つた。山田は下宿の二階に目をさました。

木曜日の朝である。今日はエスペラントの科學講義のある朝である。

俺は、ピツクリして床から出てまだ夢心地で居る山田の顔を見て、ガラ／＼と笑つた。山田はやうじと齒磨粉とを持って廊下に出た。

「夢でよかつた」

彼は一人言を云つた。俺は彌々ガラ／＼と笑つた。山田は實在の事を夢と思ひ倣して居るのだ俺の力は山田に十分間にして三時間の経路を得させたのだ。それも時と所とを超越した經驗を與へたのである。それを只一宵の夢と心得て居る。俺から云へば明瞭に實在の事も生きて居る山田から見れば、夢と思はれるのだ。

此の世に生きて居る者の不幸と不徹底を俺は沁々と思はざるを得ない。

パタリ／＼と鹽罫を重ねる様な音がする。五六十人の學生は乾からびて了つた屍體の筋肉を一枚一枚と割いて繪圖と見くらべて、その筋の骨に附着する部位を驗べて居る。

一本の筋肉を附着部できりはなして、ペタンと臺の上に投げて、又その下に表れて来る筋を驗べる。

顔面の筋を驗べて居る學生が、顔面とは思はれぬ程度に異状を呈して居る顔面の筋肉の一つを挟んで、

「この筋肉で笑つたんだぜ、此の婆さんは」

と隣の學生に話しかける。

「驚なかせた事もあーるか」

誰か唄の調子をつけて歌つて居る。

「ああ、南無阿彌陀佛」

腹部の胃を開いて、内にある食餌の残りを手でつかみ出す學生がある。

學生等は全く解剖に慣れきつて了つて、屍體を見ながら、辨當を食つて居る者もある。

「こいつは變だぜ、繪と違つてるよ」

「そりやさうだらうぜ、何しる日本人と獨乙人だからなア」

此の話を後ろからきいて居た助手が、

「そんな事があるものか。君そりや筋が一枚ペタリとくつついて居るよ。まだ二枚を離さなくて

はいけな」

「あゝさうですか」

學生がよこれた手で頭をかいいた。

「君頭をかいちやアきたないよ」

學生は初めて氣づいて流し場で頭を洗つて居る。

三月に入る。冴え返り冴え返りながら、季は春めく。午後の五時山田は珍らしく長いマントをきて赤門を出た。山田は醫科に入學以來寒い時は常にオーバーコートをきて居た。然るに彼は今日は高等學校時代に着古るしたマントを裾長にきて居る。彼は人を恐れる姿で足早に赤門を出た。赤門を出て本郷通りに來た時初めて安心した顔色を浮べたが、程なく又キョロ／＼と四方を見廻して、スタ／＼と歩るき出した。

彼は森川町の下宿の自分の室に入った。そして机の上にある手紙を見ながらも、開封しやうとせず、押入れの戸をガタ／＼とあけた。上の段には夜具が入つて居る。下には本箱が一つと行李が一つ入つて居る。その本箱と行李との間に大きな硝子製の瓶があつて、その中には昨夜買った来たアルコールが、一ぱいに入つて居る。

山田は左の手を動かしてマントをボタンとぬぐ。右の手にはガーゼに包んだものが下つて居る。彼は頭を押入れの中まで入れて、その包をガーゼのまゝ、アルコールの中に入れた。アルコールがポト／＼と外に流れ出した。一寸舌打ちをした彼は、ぬぎ捨てたマントの裾でこぼれたアルコールを拭つて居る。アルコールは案外簡単にラシヤのマントに吸収された。

辛うじて安心した彼は又手をアルコールの中に入れて、靜かにガーゼを引く。コロ／＼と包の内容が動いて、ガーゼがスル／＼とぬけて出る。

アルコールの中には人類の脳髓がそのまま見えて居る。彼はそれを上から見たり。横から見たりした後、押入れの戸をしめた。

彼は自分の指を鼻先に持つて来て一寸かいで見た。アルコールの臭みのみであつた。

「脳髓をコツソリと持ち出して来たな」

俺は大喜びをした。俺は學生の或る者等が解剖實習室に於てのみ研究の材料として許されて居る人類の脳髓を、時としてコツソリ門外に持ち出して居るのを知つて居た。彼等は定まつた短時間間に腦の全般を研究する事があまりに急がしいのと、又一方には好奇心から何の考もなく此の脳髓を學校外に持ち出すのである。

或る者は満員電車の中で人波にもまれて、脳髓をグザ／＼にして了つて、捨て場に困つて居る者もあつた。又或る者はコツソリ之れを自分の室に置いて夜深更、研究もせずに大河へ持つて行つて捨てた者もあつた。

山田も亦此の脳髓を下宿屋の二階迄運んで来たのである。

山田は二學年の終りに施行される解剖學の試問に對する勉強を初めて居た。毎夜おそく迄書物やノートに赤い線を引いて居る。最もおそく彼は脳髓の構造を驗べ出した。

夜の二時である。山田は十二時頃注文して食つた蕎麥の碗を室の隅に押しやつてから室の障子に釘をさした。そして室の中央に迄机を持ち出して、その上に洗面器を置いて、楮押入れの戸をあけた。脳髓の入つて居るアルコール瓶が光る。彼は之れを机の上に運んだ。

両手が静かに瓶の中に入れられる。脳髓が山田の両手の間に挟まれて豆腐の様に形をかえて出て来る。洗面器の中に脳髓は移された。

山田は解剖圖を開いた。そしてその圖に合せて脳髓の外形を驗べて居る。何の音もせぬ眞夜中である。

俺は山田が熱心にアチコチと脳髓を動かしながら研究して居るのを見た時、彼が本心を打ち込んで勉強して居るのに感服した。

山田は先づ腦底の最も前方にある嗅神経束をピンセットを以つて動かした。その時俺は毛髪を焼く臭氣を山田の鼻先に送つてやつた。山田は一寸その臭氣に感じたらしいが、まだその臭氣のために心をひかれる様子がなかつた。

俺は直ぐに蠟の燃え残つた時の臭氣を送り續いて堇の花の香氣を送つてやつた。その香氣は室を満たすに充分なる程強かつたのである。

山田はその芳香に氣づいたと見えて、一時鼻尖をピク／＼と動かしたが、その芳香の源を捜ぐるために後ろを顧みた。その時俺は自分の姿を表して彼の後ろに立つて居たのである。

山田は冷つとして俺を見つめた。俺は五十歳程の瑞西人として彼の前に表れたのである。

山田は俺の姿を一瞬時見て直ぐに眞青になつて下を向いた。その拍子に俺は山田の三叉神経に恐るべき神経痛を與へてやつた。

彼はその痛みに堪えられなくなつて、顔をしかめて机の上に伏した。彼の眼から涙が流れた。

神経痛は一二秒で終つた。彼は痛みから解放されて、氣ぬけがした様に一時呆然として居たが、突然又も後ろを振り向いた。俺は自分の姿をかくす暇がなかつたので、己むなく彼に笑ひかけた。

その笑が俺の顔に浮ぶや否や、彼は

「あッ」と聲を立てた。俺は直ぐに姿をかくした。

シヨツクから放たれて彼が又も後ろを見た時には只白い障子があるのみであつた。

「何とした事であらう」

山田は今見た影の瑞西人を思ひ出さうとして居る。彼は氣の迷ひと云ふものであらうと簡單に考へて又脳髓を見つめた。

彼は外形を充分に検査した後、一つの大きな平たい刃物を出した。そして脳髓を片手で押さへながら、その刃物で腦を二つに割つた。

割面にいくつかの灰白質が表れる。彼はその各々を圖面にひき合せて居る。  
その時。……………

春の夕暮である、東京の郊外の櫻の名所である。大河の堤に長く続く八重櫻に、出店は鹽せんべいをうり、櫻いかを賣つて居る。色々の變装をして人々は字そのまゝの櫻狩りをして居る。よしす張りの店に三斗の酒を傾けて居る連中や、それを見物して居る花見の人達。

その花の下を一人の十八九になる女が歩いて居る。その姿は法界節の姿である。派手なちりめん模様に、裾をはしよつて、紅いけだしがなまめかしく、草履を結ぶひもが緑である。手に胡

弓を持つて居る。

女は美しく頬をそめて居る。土手の上を胡弓をひきながら浮調子の唄をうたつて行く女の姿に人々は皆振り返つて居る。

暗の夜に移る。

女は大河の、それも都に入つた所の葉櫻の堤に立つて居る。船が暗の夜の水の中をこいで来る。只ろの音のみが水を渡る。女は石を拾つて袂に入れて居る。暗の中ながら女の姿が浮き出して居る。……………

お待ちなさい」

山田は聲を立てた。パツと電氣が灯る。下宿の二階である。彼の前の洗面器には、一つの人の脳髓が二つに割れて置いてある。

山田の室の直ぐ下の横町の豆腐屋が起きたのか。豆をする音が響いて來た。



## 戀

俺は生前戀と名づけられる事を経験しない譯ではない。俺の妻女は瑞西の或る國の王女であつた。その王女を俺は戀をして貰つたのではないが、妻に對する愛情は充分に持つて居た時期のあつた事は確かである。が妻にする迄の間の戀と云ふものを俺は知らずに死んだ男である。然も一時とは云へ俺の戀の對稱となつて居た俺の妻女は、俺があの大事件を起すに先立つてツーン湖に身を投げて死んで了つたのである。従つて俺は戀をした事があると明白に他人の前で云ふ程の勇氣を持たぬ男である。此の不幸な男の俺が、日本に迄來て初めて他人の戀を味つたと云ふのは、少々恥かしい譯ではある。

戀  
俺が生きて居たのは千七百年代である。今は千九百年代に入つて居る。人類にとつて我等の時

代に刺戟として價値のあつたものを、今日は何の刺戟をもうけぬ迄に人類は變つて來て居る。幸に俺は死後の生活を享樂する餘裕と勇氣があつたので、他事ながら人類の戀を見る事が出来たのである。

醫學生としての戀の山田はもう醫科大學の卒業近くなつて居た。俺は山田が解剖の實習を初めた頃から、山田の身について色々の事を仕組んでその結果を冷眼に見て楽しんで居たのであるが山田が一生に一度の戀をする迄の出來事に就いては茲に書く程の事件がなかつた。

山田は若々しい肉體を持つ青年となつた。彼の心の中には青春が羽を搏つて機會を待つて居たのであつた。

俺はかう云ふ場面を見た事がある。

春の夕暮であつた。東京附近では先づ大河と云はれる河の、東京の街に流れ入るよりも上流の或る静かの河岸に、一人の青年と一人の處女とが、櫻草の咲く中に腰を下して語つて居た。

周圍には誰も居らなかつた。二人の居る河岸には時として鳴く蛙の外には何の音も聞こえなかつた。

つた。

此の静かな春の夕暮を遙かに街の音をへだて、櫻草の中に坐つて話して居る二人は誠に幸福そのものゝ表れであつたのである。

「静かな景色ですね」

「何だかうす氣味の悪い程の静けさです」

二人はかう話して居た。

「幸福と云ふものは羽を持つて居ます、大空に迄も人を高める程の羽を持つて居ます。足は地を離れて、身は中空に昇る。かうして幸福は清く終るものです」

男がかう云つて女を顧みる。

「ですけど、もし羽をうつて幸福が一度身を離れたならば、私達は一生の心の怪我をしなくてはなりません。幸福の持つ翼は餘りにかろらかではありませんまいか」

「ええ、それですから、幸福に舞ひ去られたものは悲しみの底に落ちます。幸福と不幸とは全く別のものでありますが、お隣りに棲む仲のいゝ姉妹でしょう」

二人の話はとぎれる。その時大河の水面をギー／＼と音を立て、船が通つた。女がその船をジツと見送つて云ふ。

「あゝした船に二人で乗つたならば……」

女の言葉の淀む時、男が云ふ。

「二人の幸福は二人だけのものでしょう。心の貧しいものは、自分の幸福を他人に見せて幸福の感を深くするのを心懸けるさうです。幸福を藝術とはきちがへて居るのです。第三者を俟つて初めて價值づけられる藝術の中に人の幸福は数へ入れられません。幸福は只孤り棲む所に本當の價値があります。二人の心が一つに溶け合つた時、初めて本當の幸福が生れます。そしてその幸福が二人のみにかくれて居る時、最も強い幸福となるのでしよう」

男はジツと女を見る、女の唇は男のそれと合ふ。

男は山田である。女は彼の戀人である。

俺は黙つて二人の傍に立つて居た。二人は幸福を説明する程の不幸に居るのを俺は沁々と思は

ざるを得なかつた。當然の結果の不幸が彼等二人を見舞つたのは、その後半年を出でなかつたのである。

俺は此の事件に就いては決して何の仕組みもしなかつたのである。只成行きを傍觀したに過ぎない。

女は男を戀して居た。男は女を戀して居た。然も戀の成熟に先んじて彼等は戀を説明し解釋して了つたのである。

二人は自分を忘れる程相手の内に溶け込む愚鈍さに缺けて居たのである。愚と云ふ徳は戀を熱させるが、賢と云ふ知は戀を除外する程、人の世を灰色にする。

俺は彼等二人の戀の遊びを長々と茲に書き續ける程興味を持ち得ない。彼等二人は戀に眼を失ふ時期がなく、戀に初めから醒めて居たのである。

二人の戀は結局心中に終つたのである。二人は互に生命を捨て合はなくてはならぬ程意を以て情をあつかつたのである。

冬の夜である。二人は或る海濱の旅館の暗い灯の下に坐つて居た。二人の前には男が持つて來

た毒薬が置かれてあつた。二人は死の覺悟をして坐つて居るのでつた。男が靜かに云ふ。

「生きて居て、あなたの生きた屍を見るよりは、私は死んであなたの幸福をいのりたいたいと永い間思つて居ました。けれど今となれば私はあなたを長く生かして置きたくなくなりました。私はあなたが生かして居る事が、あなたの幸福となるとは、どうしても思はれなくなりました……」

女は黙つて泣いて居た。俺は黙つて泣いて居る女の心に、ヒラとひらめく情を見た。「私は此の男に殺されるのだ」と云ふ考が女の意識に上つたのである。俺は彼等の敢行する心中は自殺でなく他殺ではあるまいかと思つた。男は女を殺し、女は男を殺すのだ、決して一つの考で一時に自らを殺すのではないと思つたのである。

男が云ふ。

「もう、夜が明けます。話して居ても限りがありません……」

男は瓶を取つた。そして女に眼で合圖をした。女も瓶を取る。

男は瓶の口に自分の唇をあてた。女も同じ事をする。男はコクリと毒を呑んだ。そして立つて

電氣を消した。暗となる。

女はまだ毒を呑まぬ、さめく／＼と泣いて居る。男の手が女のかたにかゝる。女は瓶をソツと後ろにおしやつた。瓶の中の毒がタラ／＼と壘の上に流れた。

三十分の時が過ぎて醫者が此室に來た時、男は昏々と眠つて居た。醫者は食道ゾンデを口から入れて胃を洗つた。男の腕には數本の強心劑が注射された。

女は一時間後、涙にぬれた袖で顔を覆つて東京行きの汽車の中に、母親と共に連れられて居た。

山田は報を得たのである。山田の生活はこれより起つたのである。二人の死を以て遂げんとした戀は、山田、人の中毒によつて終りをつげたのであつた。

山田は沁々と、彼を偽いた女を恐れたのである。女は山田に毒を強ゐ得たが、山田は女にその毒を強ゐ得なかつたのである。

女を恐るゝ心は、女を悪くむ心と呼んだ。たゞに彼の女に對してのみならず、すべての女に對する悪しみを起させたのである。

山田は案外悶へなかつた。彼は甚だ簡単に女に對する復讐を初めた。

彼がその後の五六年女に對して敢てした復讐は痛快極まるものであつた。或時は遊里の巷に女を弄んだ。ある時は豫定して女を戀し豫定して之れを弊履の如く捨てた。

かうして山田の女に對する復讐が、山田に刺戟を與ふる事が少なくなるにつれて、山田の心は戀の幸福に居る人々に對する悪しみに變つて來たのであつた。

山田は自動車の運轉手になつて居た。東京の街を貴族に雇はれて走る時、彼は戀らしき者を見る度に、その享樂の妨害をした。或る時は郊外の散策に居る若き人々を、故意に傷害した事もあつた。彼の生活は性格と共に墮落して行つた。

彼が我から帝都を捨て、旅に出た時、俺は彼の身にしつかりと喰ひ込んで居た。彼は伊豆の温

泉場へ客を運ぶ海岸の險路を走る自動車の運轉手となつたのであつた。

或る春の日である。彼は真鶴から湯河原へと通ずる海沿ひの險路に、自動車を運轉して居たのであつた。彼は此の道路が海に沿ふて幾曲りする度に、一度ハンドルを動かすのを誤れば、自動車は忽ちにして深い海の中にころげ落つるのを知つて居た。

その日は先づ朝の八時に眞鶴驛で二人のお客を乗せて伊豆山に行つたのである。お客の二人は若い良家の娘らしい美しい人々であつた。

「伊豆山へ」と此の娘達が云つて、彼の受持ちの自動車に乗つた時、彼は恐るべき心をかくしてほゝ笑んだのである。自動車は二十分も走つた時、海添ひの道に出た。右はきり立つた山である。左は傾斜した僅かばかりの土地の上に松と雑木とが繁つて居て、その下には眞青な海が春の潮を湛えて居た。

道は山裾を縫つて幾曲りする。彼は一人ハンドルを握りながら考へた。此の車の中には世にも珍らしい二人の女が乗つて居るのだ。彼女達は今伊豆山へ行かうとして居るのだ。然も春の装ひの美しさは都の春を彼に思ひ出させるに充分である。自分は今自動車の運轉手となつて此客を

運ぶのである。今自分があの先に見える道の曲りを過ぎて、あの先の山裾が海に突出した所の道で、もしハンドルを右に廻す事さへ怠れば、自分は此の美しい二人の女と一所に春の海に落ち込む事が出来るのだ。

自分は過ぎし日、此の車の中に居る娘の様に美しい女と戀に落ちた事があるのだ。然もその女を自分は生命をかけて戀して居たのだ。それをあの女は毒を呑む迄になつて、自分を偽つて逃げて行つたのだ。女と云ふ此の世の女は皆あの女の様な悪むべき心を持つて居るのだ。

よしあの出鼻へ自動車がかさしかゝつた時、ハンドルを廻すのを止めてやれ。そうすれば俺は此の二人の女と一所に死ぬ事が出来るのだ。痛快だ。どうせ一生だ、いつか死ぬものならば今日こそ恵まれた死の日だ。

彼はかう思つて道をうねりした、そして道が眞直ぐに海に向つて進む方向となつた時、遙か遠い海を見た。美しい湖の上に緑の島が浮いて居る。空には雲もなく只春の霞であらう、水の上が稍茫として居る。

彼の目が段々と遠い海から近い所に動いた時、突如として山櫻が一本松に混じて咲いて居るの

が目に入つた。海の碧、松の色、それに山櫻の薄紅色。彼は毎日通る此の道に初めて美しい色を見出したのである。

美しい景色だなど彼が感じた時、彼の両手はハンドルを右に廻して居た。自動車はする／＼と海への出鼻の路を廻つて了つた。

そこに山吹の花が咲いて居て、雉子が一羽飛び出した。

「チエツ」

彼は舌打ちをした。自動車はスル／＼と山裾を廻る。

俺も意氣地がないな、と彼は自らを嘲しつた。よしあの次の出鼻でこそは、自動車もろ共に海の中に轉げ込んでやらう。そして俺の二十六年を葬つてやれ。道連れには幸に美しい東京の二人の娘がある。

自動車はスル／＼と路を滑つて、又路は海に向つた。自動車はまっしぐらに進む。將に山の出鼻に出て、今度こそはと彼がハンドルをギユツと握つて脚下の海を見つめた時である。

「運轉手さん、まだなか／＼なの」

美しい聲が後ろから聞えた。その聲をきいた瞬間にハンドルは自づから右に廻された。「え、もう伊豆山は見えます」

かう答へて彼は冷汗を拭つた。道は既に海を後ろにして山に向つて居た。

伊豆山で二人は車を下りた。そして多分のチップを客は彼に渡しながら、

「どうも御苦勞さま。命拾ひをしました」と云つて二人の美しい人はニッコリ笑つた。

彼はチップを握りながら心の中で、運のいゝ奴等だな、いま／＼しい事だと思つた。

その日の午後彼は又真鶴から湯河原迄二人の客を運んだ。それは藝者をつれた四十過ぎの商人風の男である。

彼は此の二人を車に乗せた時、消し難き羨望に焼きつけられた。彼は此の客こそ海の中に落ちてやらうと思つた。

然し道が危険になると共に、こんな世の中を不眞面目に渡る奴等と一所に海に落ちる氣にはな

彼はハンドルをもどかしく握りつめながら心をあせらせて、思ひ定めた出鼻にさしかゝつた。

彼は行手を見た。道が稍上りである。その上りつめが海となつて、遠島が水上に浮いて居るのを見た。彼は今こそはと全速力を出した。そして心の中に矢の様に浮き出して来る二十六年の夢を追ひ拂ひ追ひ拂ひ、何のために死ぬのかを全く忘れて、大事業をなし遂げる果斷と勇猛心とをふるひ起して、一直線に進んだ。速力は二十哩を越えて居る。

一步にして彼の自動車は斷崖に落ちんとする。突如白自動車の前に立ちふさがる一瑞西人がある。彼は「アツ」と聲を立てた。

「馬鹿ツ」

彼が再び叫んだ時、瑞西人はヨロ／＼とよろけて斷崖を後ろ様に海に落ちる。自動車はスルスルと右に廻る。プリーキが氣味の悪い音を立て、數間にして止まる。客は聲を立て、前のめつた。

「あッあぶなッ」

女が黄色い叫聲を立てる。

彼は運轉手臺をとび下りて、山道の出鼻迄後もどりをして、斷崖の下りのぞき込んだ。そこは白い潮の渦がくるくると廻つて居るのみである。

彼は眞青になつて立つた。外國人はどこから出て車の前に立つたのか。あの深い海底に落ちた外國人はどこから出て來たのか。彼はジツと海を見つめて居る。

俺は早くから此の山道の海への出鼻で山田の來るのを待つて居たのだ。彼の自動車が全速力で此の海に落入らんとした時、車の前に表れたのは俺の姿である。俺は海の底を見て立つ彼の後ろから、カラ／＼と笑つてやつた。彼はその笑聲に初めて我に歸つて後ろをふり返つた。そこには大きな岩があつた。岩の上に山躰躰が一むら緋に燃えて居るのみである。

彼は沈痛な面持ちで五六歩歸つて運轉手臺に乗つた。車は又走り出した。

伊豆山の千人風呂に運轉手の山田は一人頭だけ湯から出して考へて居る。夕暮の六時である。

れなかつた。道が危険になる度に、藝者は客にしがみついた。

彼はそれを物音でさとりながら、此の出鼻は二年前外國人が落ちたとか、此先の出鼻では乗合が何度も海に落ちたとか云つて、客をおどかして居た。

そして客を無事に湯河原迄送り届けた時に、貰つたチップが思つたより少なかつたのを知つて、いま／＼しくて仕方なかつた。

かうして彼は毎日海に落すに足る人を求めつゝ夏近くなつたのであつた。

一日彼は眞鶴驛で伊豆山を通つて伊東に出て、それから伊豆の西海岸を通つて沼津迄出る道を廻遊したいと云ふ旅人に雇はれた。

客は新婚らしき若い二人で、女は美しい高島田を結つて居た。

「オイ、山田うまい口にあたつたな」

「そうでもないぜ、あてられ続けに四日は有難くもない」

彼は仲間の者と此の會話をして客を車に乗せたのであつた。彼は此の客を車に乗せた時既に此



の二人こそは彼が待つて居た二人であることを思つた。新婚の二人、彼はこれを見るさへ胸がつぶれる程であつた。若し彼の戀があつた事に出會はなかつたならば、今頃は當然彼は醫者となり彼女を妻として此の客の様に旅に出られたのであらう。それを彼の戀人は立派に彼を裏ぎつて、然も彼を殺して自分は逃げ去つて行つたのである。此の客こそは彼の車で、あの碧い海に落ちるべき二人でなくてはならぬ。

彼はかう決心して二人を車に乗せたのである。彼は伊豆山迄の道の曲りをよく知つて居た。三つ目のあの大曲りを過ぎて且那山にかゝる所のあの出鼻、その出鼻の下はきり立つた岩で、その岩の根に白い波が口をあけて自動車の落ちるのを待つて居る、その出鼻こそ彼の二十六年を葬るに格好の場所である。彼の車に乗る二人は今幸福の頂上に居る二人である。その幸福を彼のハンドル一つの握り方で海の中に完全に葬り去る事が出来るのだ。

彼は思ひ勇んでハンドルを握つた。自動車は矢の様に走つた。彼にとつては此日程愉快の日はなかつたのである。晩春の日は額に暑かつたが、矢の様に走る運轉手臺には風が水の様流れ入つた。

彼の心にはその日の出来事が織る様に浮んで居る。かたい決心で出た眞鶴驛頭の彼、あの海への出鼻での心の緊張、突然表れて海に落込んだ外国人。道の恐ろしさに、是非伊豆山で泊ると云ひ出した新婚の美人、それを許して豫定の變更を云ひ出した新婚の夫。それらは彼の心のすべてを占領して居る。

温泉の外には荒くなつて來た海の波がドクドクと音を立て、打ちかゝる。その物音の中に彼は湯にしたつて居るのである。

そこへ一人の客が裸體になつて入つて來る。かつて見覚えのある人である、何處かで見覚えのある胸のほくろの一つ、それは夢に逢つた人かも知れぬ程の淡い追憶の人の姿である。

彼は誰であつたらうと、盗み見をしながら考へた。彼が湯から出て湯瀧に打たれるために二三歩あるいた時後ろから聲がした。

「失禮ですが山田君じやありませんか」

彼は愕然として後ろを振り向く。その客は笑ひかけて居る。

「私は山田ですが、あなたは」

「大辻ですよ」

彼は冷水をあびる程恐怖した。大辻三郎、それは彼の學生時代の同級生である。然も彼の戀人が、彼を殺して逃げた後に、風評のあつた大辻である。

「暫らくでしたな」

大辻は又笑ひかけた。

「暫らくです」

大辻は又彼を見た。そして一二分考へた後、

「失敬ですが、君が今日の運轉手じやなかつたのですか」

彼は棒立ちになつた。百雷が落ちる。あゝ今日の客である。新婚の夫である。彼が今日殺さうとしたのは此の大辻である。かう考へついた時彼は直ぐに、今日の女があんな女はなかつたらうかと考へて見た。幸にもそれは彼の女ではない。見知らぬ人である。

「えゝ、お恥かしい次第です」

「いや、どうも見た人だとは思ひましたが、まさか君に逢はうとは思ひませんでしたよ。そして

何ですか、君はあの頃退學されて行方不明だときいて居ましたが、いつからこちらにおいです」

「面目ありません。まアきかずに居て下さい」

彼はあたふた、ぬれた身體に宿の浴衣をきて廊下を走る様に逃げて行つた。

その夜客に泊めて貰つて翌朝又客を乗せて伊豆廻りをする筈になつて居た彼は、宿の浴衣のまま散歩に出る様子で宿を出た。彼は坂になつて居る道を登りながら考へた。

古い昔ではあるが大辻は彼の眞劍の戀の邪魔をした男である。然も今日は別の新しい妻をつれて、伊豆廻りをして居るのである。何故先程あの山の出鼻で思ひきつて自動車を海に落す事が出来なかつたであらう。

又考へた。大辻などを海に落して何になるか。古い戀の恨みを果すためならば、自分の命迄捨てるに及びはしない。あの時突如として車の前に出て呉れた外國人は誠に自分を救つてくれたのだ。

かう考へながら彼は坂を登つた。そしてあづけて置いた自動車小屋の前に來た時、彼はフト自

自動車を動かして見たくなくなった。自分一人浴衣のまゝ、此の暗夜に海沿ひの道を走つたらば、どんなに愉快であらう。

彼は自動車を引き出した。そして運轉手臺に乗つて、ヘッドライトを灯して、ハンドルを握つた。彼の手は知らぬ間にハンドルを廻して、眞鶴迄の道を車は走つて居た。

夜道はヘッドライトの照らす以外は風の音と波のみの暗であつた。彼はいつの間にか旦那山のトンネル工事の傍を過ぎて、その日の夕暮お客もろとも車を海に落さうとした山近く來た。

その時、右手の遙か先の海の中に漁火が五ツ六ツ見え出した。その灯を見た時、彼はフト或る考に襲はれて、ハタと車を止めた。彼は浴衣のおびをクル／＼といて、その帯をビリ／＼と破り初めた。その帯が五六本の細繩になつた時、彼はその繩でハンドルを車臺の縁にシツカリと結びつけたハンドルは眞直ぐに前方に向けられて居る。

彼は自動車を下りた。そして微笑を湛えながら右の手を長く運轉手臺に入れて、スキツチをひねつた。車の下からガタ／＼と云ふ音が起る。彼が飛鳥の様に二三歩山の方にとびのいた時、乗手のない自動車は急に走り出す。眞直ぐに前方を向いて音を立てゝ走る。その爆音が一分も続いた。

て一秒毎に遠くなつた時、暗夜の空にハツとサーチライトが光を投げて、後は突然靜寂となつた。

風が峯から海へと落ちて來る。

「ハハア、うまく海の中へ落ち込んだなア」

彼は初めて聲を暗の中から立てた。自動車は自ら走つて海の中に落ち入つたのであつたらう。

「これでサツバリした、あははは」

空虚の笑聲が風に呑まれた。

彼は道端の石に腰を下して頭を抱へて居る。彼の浴衣が暗にホノ白く動いて居る。彼は頭を抱へたまゝ一時間近くも動かぬ。

すゝり泣きの聲がする。果てはその聲が男泣きの聲となつた。彼は慘として泣いて居る。彼の泣く道の下には數十丈の下に海が口をあけて、彼の落ちるのを待つて居るのである。

俺はソツと彼に近づいた。

「山田、どうした」

彼はハツとして顔を上げて、暗をすかして俺を見つめた。

「誰だ、貴様は」

彼はかう云ひきつた時、初めて俺の姿を見定めたのであらう。

「何だ、貴様は今日俺の自動車の前に立つて海に落ちた毛唐ではないか」

「あゝさうだ」

彼はジリ／＼と後ろに身を動かした。彼は魔を見る恐怖に満ちて身をふるはせた。

「どうしたのだ、俺はもう五六年貴様に憑いて居るのだが、今夜の様に貴様の泣いたのを聞いた事がない。何が悲しいのだ」

彼は恐ろしさを通り越して了つたのであらう。落付いた聲を出した。

「悲しむのが何故悪るい。悲しいから泣いて居るのだ。餘計なさしで口をするな」

「まだ若いじゃないか、まだ何とでもなるぞ」

「馬鹿ツ、若いから泣くのだ。貴様は一體誰なのだ」

「きゝたければ話してやる。俺は醫者につく怪物なのだ」

「ふうん、いつから俺に憑いて居るのだ」

「今話したらう、貴様が學生で解剖の實習を初めた日からだ」

「うぬツ、貴様が……」

彼は立つて俺に打つてかゝつた。俺は五六歩逃げた。彼は俺に追ひすがつて俺の首にしがみついた。

二人は上になり下になつて五六分も争つた。その時俺の身は急にフワリと軽くなつた。

ハツと思つて俺は姿をかくした。彼は數十丈の崖から海の中に落ちて行つた。

風の音。海の果ての東の空がほのかに紅い。月が出るのであらう。

## 死

時、不明。

所、深山、杉の大樹舞臺所せき迄に立つて居る。地面一體に齒朶水苔などジメ／＼と生えて居る。

晩夏の深夜らしく、杉の峯渡る物すごき風の音にて幕あく。水苔青く光る外、辛うじて杉の立木見える程の暗黒。

死

ルイ・パンリウ、靜かに舞臺の奥、杉の立木の間から登場。氣味わるき瑞西人。年齢七十年前

後。黒き服、黒き帽、右手に眞白なステツキの短かきものを持つ。

深山に棲む鳥ホー／＼と鳴く時、ルイ・パンリウは舞臺の中央、杉の立木の間迄出て来る。胸につるす十字チラと光る。

此時突如として若い女の泣き聲聞ゆ。

ルイ・パンリウ、その聲に驚ろき杉の立木の間をすかして見る。

舞臺静寂に歸する時、ルイ・パンリウは右手のステツキを眞直ぐに前方に出して、靜かに靜かに杖の尖で十字を三回きる。

舞臺の右手より幾分宛光強くなる。それにつれて、光を恐るゝが如く、ルイ・パンリウ左手の立木の間より退場。

右手からの光と共に、山田六郎登場。年二十六歳、自動車の運転手姿、洋服ビショ／＼に海の潮にぬれ、帽子もなく、オールバックの頭髮も亂れてぬれて居る。舞臺中央近く来て、キヨロキヨロと立木の間をすかして見る。

山田。(あちこち求むるものある様に見すかしながら)畜生、あの他國人はどこへ行きやがった。俺の一生を臺なしにしてしひやがった。(間)(聲を落して)あゝ寒い(自分の袖を両手でさする)あゝ。(ぐたりと杉の立木によりかゝりながら坐る)(間)(頭を深くたれて)仕様がないなア。俺は一體どうしたんだらう。(ジツト考へ込む)

突然、若い女の樂しげに笑ふ聲がする。

山田。(頭を上げて一時聲に耳をすます。後急に立ち上つて)あいつの聲だ。(身を動かして聲の方へ行かうとするが、聲の方向が判らなくて當惑する)(捨鉢の聲となつて)えゝ、勝手にしろ、勝手にふざける。貴様なんかも戀しちや居ないのだ。馬鹿奴。俺は只貴様を弄んでやつたのだ。誰が貴様なんか戀をする奴がある。(腕をくみ考へる)

舞臺暫時明るくなる。左手の杉の立木の間から、ルイ・パンリウ氣味悪るい微笑を湛えて登場。

灰色のマントを裾長くかぶり、帽子をかぶらず、白髪を長く後ろにたれて居る。右手をのばして、山田の方を指さす。

ルイ・パンリウの後ろから立花時子登場。十八歳、派手造りの娘風。  
山田の方を遙かに見る。

ルイ・パンリウ、山田の方を指さしたまゝ時子の方を一寸見る。時子は全くルイ・パンリウに氣づかず、一步宛山田に近づく。ルイ・パンリウは指さしたまゝ、時子の動くのを見て微笑したまゝ静かに退場。

時子はなつかしげに山田に近づき、一三步迄來た時、山田の青白い顔と、潮にぬれた服とに氣づき、同情する振。

時子。(思ひきつた様子で) 山田さん。

470  
山田。(物うげに顔を時子に向けて、驚ろいた様子もなく、又ジツと先きを見たまゝ) あなたの來る所ではありません。

時子。(稍意外の顔となり) どうなさつたのです。私をお忘れになつたのですか。

山田。(無關心に) えゝ忘れちゃいましたよ。

時子。(一步前に出て、なつかし氣に) まア、忘れつばい方ね。時子をお忘れになつたの。あの時子を。一緒に死のうとした私を。

山田。はア、そんな事がありましたらうかね。

時子。(いよゝあせり氣味となつて) まア、あんな大事迄忘れておしまひになつたの。(間) あなた。山田さん。あなたは何か誤解していらつしやるのではありませんか。

山田。えゝ誤解して居ますよ。

時子。(ますゝあせつて手をふれんばかりに山田に近づいて) 山田さん、一寸私を見て頂戴。時子を一目見てやつて下さい。

山田。(失心した人の様に無表情に時子を一寸見る)……

死  
時子。(亢奮しきつて) 山田さん。(山田の肩に手をかける。冷ツとしてその手をはなして) まア冷たい。(身をふるはせる)(自分の手を見て) 海草がついて居るわ。(山田の洋服などを見て)

あゝ、大變だわ。海苔がついたり（フト頭を見て）まア海月がついて居る（氣味悪るげに一二歩退く）

山田。（相變らずの無表情で）お歸りなさい。早く。

時子。（哀れを催して）どうなさつたのあなたは。そんなにぬれて、海からでも出て来た人の様に。

山田。（稍力づよく）海から来たんです。

時子。（不審氣に）どうして海から。

山田。（時子を見て）海に落ちて死んだんです。

時子。え？（自分の耳を疑ふ様に一步山田に近づき、直ぐに又氣味悪るくなり二三歩離れる）

山田。（時子をまだ見つめたまゝ）私は死んだんです。他國人と喧嘩して海に落ちて死んだんです。

時子。（段々と後ろにさがる）あの内氣なあなたが？

山田。（時子をジツと見つめて）何がそんなに恐ろしい。（急に調子をかへて）怖がらずに其處に

立つて居ろ。俺の一生はお前のために臺なしにされたのだ。一緒に死んでくれとはお前が先に云ひ出したのだ。俺は死ぬのはいやだと云つたのだ。それをお前は死ぬより外に道がないと云つたらう。だから俺は毒を呑んでやつたのだ。お前は俺に毒を吞ませて、自分は毒を投げ捨てて逃げて行つたのだ。そのお前のトリックにかゝつて俺は俺の青春を臺なしにしてつた。そればかりか、俺は死んで了つたんだ。海に落ちて死んだのだ。それも見た事のない他國人と一時の感情のために喧嘩をして海に落ちて了つたのだ。（段々と哀調となる）俺は死んで了つたと思ふと、（間）死んだと思ふともう取り返しがつかなくなつた。お前はそんな派手な姿で居るのに、俺は俺は（間）こんなぬれた着物で、かうして山路を迷つて居る。迷つて何處へ行くのか。あゝ（杉の根本に坐りながら、頭を抱へる）

時子。（山田の言葉をきき、初めの中は段々恐ろしくて逃げながら、後には同情と哀憐の様子をする）山田さん。

山田。……………

時子。山田さん。私の云ひ分をきいて下さいませんか。（二三歩山田に近づく）



死

山田。(手にて聞きたくないと云ふ)……

時子。(悲しくなつて)山田さん。恨まないで下さい。私が悪うございました。今更ら何も云ひません、云へた義理でないと、あなたもお考へになりませう。

山田。(坐つたまゝ顔を上げて時子を見る)時子さん。

時子。え。

山田。あなた死んで下さいませんか(哀れみを乞ふ様に時子を見る)

時子。(恐ろしくなつて二三歩退く)……

山田。ねえ、時子さん。(立ち上つて、ヨロ／＼と一二歩時子に近づく)

時子。(後づさりする)……

山田。(ふと顔色を變へて、怒つた口調となり)頼んでもきかないのか。お前は一度も俺の頼みをきかないのか。俺は貴様の頼みを皆きいてやつた。死ね、死ね、死なないか。(二三歩時子にせまる)

474 時子。(無言のまゝ逃げる)

475

山田。(追ひかけて手をふりあげて、なぐりかゝる)

突然立木の影からマントをきたたまゝ、ルイ・パンリウ現れて、マントをバツと時子の頭からなげかけて、山田の前に立つ。

山田。(パンリウを見て吃驚。残念でたまらぬ表情をして、後絶望の口調で)あゝ、又貴様が。

(頭をかゝへて坐る)

ルイ・パンリウは山田を頭の上から見つめて微笑を洩らす。深山の風の音。舞臺徐々に暗となる。

二

死

時、不明。

所、日本の大都市の中央のカフェーの一室。室全部に幾つかのテーブルと椅子とあり、壁も敷物も椅子も皆深碧の色調。電燈亦青光を室に満たす。

幕靜かに開くと、右手の隅に給仕女三人程、椅子に腰かけ、テーブルにうつ伏しになつて昏々と眠る。

左手の方の椅子には學生四人、之れ又昏々と眠りこけて居る。

舞臺正面の奥に色々の洋酒棚にならび、その前の廣い臺にコップ二つ三つ載り、酒場の人一人此の臺に頭を載せて眠つて居る。

ルイ・パンリウ右手の奥のドアを靜かにあけて登場。人々の眠る様子を見渡す。ルイ・パンリウは黒の帽を目深に、黒の服にて、白い短かいステッキを右手に持つ。

人々の深い眠りに落ちて居るのを確かめて後、杖を長く出して十字をきり、コソ／＼と右手へ退場。

## 舞臺暫時空。

丸山皎齋左手より登場。年齢八十歳、白髮白髯、田舎物らしき着物、醫者らしき白足袋にて麻裏草履をはく。

呆然として自他を辨ぜざる無表情。人々の眠れるを全く気づかず、只無意味に歩み、室の中央にあるテーブルに近づく。

丸山。(此世の旅に疲れきりたる聲にて) あゝ又呼び出されたのか。もう大抵で勘辨して貰はにやたまらんな。一體、わしは死んだんだらうか、まだ生きて居るのだらうか。(物うげに考へ込む)(間) うん、それはどうでもいゝが、何か呑みたいな。かう眞暗では何とも仕様がな。 (一寸手を動かして近くを捜る。手に觸れるものなし)(思ひ出した事ある様に) あゝ死んだのはもう餘程前らしい、千年もたつてるのだらう。あゝア疲れたなア(二三歩あゆみ椅子を捜しあてゝ、くづれる様に坐り、頭を前にたれる)

ルイ・パンリウ、右手からコップと登場。舞臺奥の棚へ行き、洋酒の瓶一本とコップとを持つて、丸山皎齋に近づき、コップに酒をつぎ、皎齋の前に出す。

皎齋は夢心地でコップを受取つて呑む。

ルイ・パンリウこそくと瓶を持つたまゝ右手へ退場。

皎齋は呑み乾したコップを手に持ったまゝ又頭を下げる。

舞臺裏より子供等五六人の聲で、

「丸るい〜丸山丸るい。袈裟をぬいたら尙丸るい。」  
と二三回聞える。

478  
皎齋此聲をきゝ段々と我に歸つた様に頭を上げて四方を見る。自分以外には何者の居るのも分らぬ。

479  
皎齋。あゝ又あの唄をきくのか。しつこい世の中の奴共だな。もう大抵であの唄もやめたらばよささうなものだに。歌ひたければ歌つてもいいが、わしの耳には入らぬ様にしてくれるといゝのだが。年寄りを年寄りなみに休めてくれないかなア。あゝ疲れた。(又力がぬけて頭を下げる)

山田六郎、運轉手姿で左手より登場。室の中を見廻して、人々の眠つて居るのを確かめて、奥の方の瓶の棚へあるき行く。瓶をあちこちと見廻して、その中の一本とコップとを持つて、笑ひながら、皎齋の居るテーブルへ来る。

皎齋の居るのを氣づかず、一つの椅子に坐り、瓶からコップに酒をついで二つ三つ呑む。

山田。あゝうまいな。暫らくぶりだ。(瓶のレッテルを見る) ははアマ、ン、ダ、リ、ヌ、カ。(又一杯呑む)(皎齋老に初めて氣づき、よく〜皎齋を見て) オヤ、こんな爺さんが居る。(あちこちと室の中を見て他の人々は皆眠つて居るのを確かめる) どうしたのだらう。こりや又恐ろしく老死

老れた奴だな。オイお爺さん（皎齋を見る）おい、おちいさん。

皎齋。（段々とめざめて、一寸顔を上げて山田を見、又頭を下げて）誰か知らんが、わしは疲れて居るんだから。

山田。だから此酒をお呑みよ。え、おちいさん。（立つて皎齋に近づき、手に持つコップに酒をついでやる）さア一杯グツとのむのだ。

皎齋。あゝまた起されるのか（物うげに頭を上げて酒をのむ）

山田。（席に歸つて）どうだね、おちいさん。うまい酒だらう。さア元氣を出して一つ話をしな

いか。

皎齋。（酒で幾分元氣が出た様子で顔を上げる）

山田。おちいさん。お前疲れきつて居るね。

皎齋。わしかい、あゝすつかり疲れて居る。何にせよ六十年近く醫者をやつたからな。

山田。え、醫者（驚ろく）

皎齋。あゝ醫者だ。六十年と云ふと、それは永い年月だからな。大分病人を助けもしたが、又殺

しもした。左様、殺した方が数が多からうな。その度にいやな氣持ちで居たよ。それで疲れき

つて了つた。

山田。（興味を持つて）さうかい、そんなに醫者つて云ふ仕事はいやなものかなア。

皎齋。それはいやな商賣だ。人助けと思つて仕事に身を入れるのは初めの二十年もあるまい。後

はいや／＼でやる様になる。それでいやならいやですめばよいが、いやですまぬので疲れる一

方でな。

山田。ふうん。俺も醫者のなり損ないだが、醫者にはなるものでないかなア。

皎齋。なるものでない。死にたい者も生かさなくてはならん。生きたい病人も殺して了ふ事が多

い。人間のする仕事の中では、一番つまらない仕事だらうな。お前も若い様だが、醫者になり

損なつて却つて幸だつたらうよ。（間）あゝだるい。疲れて來た。（頭を下げる）

山田。（皎齋を見て）おちいさん、も一杯のまないか。（立つて酒をコップにつぐ）

皎齋。（呑み乾して）あゝ、酒は毒だが、疲れはとれる。（山田を見て）見ればお前もまだ若い様

だが、どうして醫者の仕事をやめて了つたのかい。

山田。魔物にとり憑かれたんだ。

皎齋。(一寸けげんな顔で) 魔物に？

山田。うん、ひどい奴にとり憑かれて、そのために命迄も捨てゝ了つたんだ。

皎齋。ふん。若いうちは氣をつけないといかん。一體どう云ふ魔だつたのか。

山田。他國人さ。

皎齋。他國人？ 異國の魔か。ふん、それは書物について來た魔だつたらう。早く魔除けをすればよかつたらうに。

山田。それが判らなかつたのさ。死ぬ時に初めて魔物に遇つたのだ。

皎齋。俺も永生きはしたが、狐に一度化かされて、狐のお産に行つたが、その外は魔物に逢つた事がない。一度逢つても見たいが。

ルイ・パンリウ、杖を持たずに右手の暗から急ぎ足で登場。二人のテーブルに近づく。

パンリウ。俺だよ、その他國人は。

山田、ハツとしてパンリウを認め、頭を抱へて了ふ。皎齋はパンリウを沁々と見る。

パンリウ。俺なのだ、今の魔物と云ふのは。

皎齋。(案外驚かず) お前は誰なのだ。

パンリウ。今の話の他國人だと云ふに。

皎齋。お前は何處から來たのだ。

パンリウ。お前の身に憑いて居るのだ。

皎齋。俺の身に？

パンリウ。さうだ。

皎齋。あはゝ。人をたぶらかすな。

パンリウ。うそではない。本當にお前に憑いて居るのだ。(山田を見て) 此の男にも憑いて居るの

死だ。

山田。(恐ろしげに顔を上げて、怖るゝ聲で)おい。もう行つて呉れ、たのむ。  
ペンリウ。行つてもいい。が、今夜はお前達に話したい事があるのだ。まじけ。俺も百五十年も前に死んだ男なのだ。(間)

山田、蛟齋の兩人驚ろく。

ペンリウ。驚ろいたか。俺は俺の正義のために自分の命を捨てた男なのだ。それを醫者が精神病者だと云つたのだ。俺は人間として正しい事をやつたのだ。それが何故精神異状に算へられるか俺には合點が行かない。だから俺は醫者を目の敵にして居るのだ。お前達ばかりじゃない二三十人の醫者に俺は取り憑いてやつたのだ。

俺に取り憑かれた奴は皆俺の思ふ通りになつたのだ。俺は今でも俺位力のある者はないと信じて居るのだ。俺の力、俺の自信は未だかつて傷つけられた事がない。

484

485

山田。(安心した語調で)さうかも知れないな。

ペンリウ。さうとも。お前達も俺の力を試す材料にされたのだ。そして命迄も捨てゝ居るのだ。

蛟齋。(不服氣に)わしは別じや、わしはお前などは何の係り合ひもない老人じや。

ペンリウ。(嘲る語調で)ふゝ。氣が付かなければそれでよい。が實際に於て俺の力は確かに人類を左右する事が出来たのだ。只一人如何しても、俺に左右出来なかつた奴がある。その男はまじだ若い男だつた。その男はすべての有り得べき事を有りと思ふ才能のある男だつた。その男はどんな突發事件にぶつかつても當然出る太陽が東から出て來た程に考へ得る男であつた。その男は實際に於て俺にさへ有り得ないと思はれる事を、有り得ると考へて居る男だつた。此の男には俺も勝つ事が出来なかつたのだ。

お前達はみんな、有り得る事と有り得ない事とを心の中で區劃して居た男だ。だからお前達は俺に左右されたのだ。どうだ合點が行つたか。

山田。(蛟齋と顔を見合せて)さうかも知れない。

死 蛟齋。ふうん。

パンリウ。(二人を見て)もう一人逢はせる男がある。(立ち上つて室の隅に行く)

舞臺、暗くなる。パンリウは室の隅で杖をふり廻して十字をきる。

ガタ／＼と左手奥の戸をあけて向山一敏登場、四十歳程の洋服の男。

向山。(室の中を歩みながら)パンリウ、又俺を呼んだのか。(室の中央に出て来る)  
パンリウ。(室の隅で)あゝ、呼んだぞ。其處に居る二人と話せ。

舞臺彌々暗くなる。

向山。駄目だよ君等は。大抵に降参し給へ。あの他國人は悪人じゃないよ。降参して下へば、それだよ。なまじ反抗して居ると意地になつて色々仕組むのだ。早く降参して下へばいいのだ。

山田。降参と云ふのは?

向山。つまり精神病だと自らさと呼ばいよのだよ。

山田。そう云はれれば、俺も少々變だ。

向山。少々ものか、まるきり違つて居るよ。あの男は自分一人精神病でありたいのだ。自分が精神病者であると決定されたのを不服に思つて、自分以外の者を精神病者にしたくないのだ。自分では今でも常人だと信じて居るのだ。だから常人と違ふ行動をする人間があつた時、その本人が自ら精神異状があると自省する事を希望して居るのだ。そして精神病者であるとあの男を學者が決定しても、自分は實は人間以上であると思ひたいのだ。つまり猫仲間を造つて見て自分は猫に見えても、他の猫の様に躍りをおどる猫ではないと信じたいのだ。

山田。分つた様だ。が今更らあの他國人と離れたつても、生き返る事は出来はしない。

向山。それはやむを得ない。過ぎた日の報いはうけるしか仕方ない。

山田。さうか。

死  
パンリウ。(室の隅から大聲で)それでいよのだ。俺は日本を立つ。その老耄はまださとらぬの

死 だな。

向山。これは駄目だ。もう魂がすり減つて居る。疲れきつて眠つて居るのだ。  
パンリウ。老筆は残しておく。

舞臺しばらく聲なし。後、室の中漸次明るくなる。向山、山田、パンリウ姿見えす、皎齋一人  
眠りこけて居る。

急に物音して五六人の酔つた學生左手のドアから入つて来る。店の人々此の物音に初めて目を  
さます。

學生共は陽氣な歌を歌ひながら、皎齋の隣のテーブルに坐る。

學生甲。おいジンをくれ。

女給甲。はい。

學生乙。いやだなア、精神病の講義は。

488

489

學生丙。面白いじゃないか。

學生丁。だが一體常人と精神病者との境界はとても判らんぜ。

學生丙。そこが面白いんだ。

學生甲。(皎齋を一寸見て、小聲で)おい、此の年寄りはどうしたんだらう。

學生乙。變だな。(立つて近づく)おい變だよ。

學生等立つて皎齋に近づく。皎齋は椅子に丸くなつて頭を自分のひざの上のせて居る。

學生乙。(皎齋の脈をふれて見て)おや、死んでるんぢやないか。

學生丙。(皎齋の顔をのぞき込む)眞青だ。

學生甲。(皎齋の顔を持ち上げんとする時、皎齋椅子から床に落ちる)あッ死んでる。

死

店の人々バタ／＼とかけて来る。女給達は遠くから氣味悪るげに見る。



死 店番の男。死んでますか。

學生甲。死んでるぜ。

店番の男。一體いつから来て居たのだらう。氣味の悪い晩だな。

學生乙。(皎齋の顔をのぞき込んで)おい、これは今日の講義に出た老讒性痴呆じゃないか。

學生丙。さうだく。

昭和十一年

五月十日

大正十三年八月廿三日發行  
大正十三年八月廿三日發行



(とかげの尾)

定價金貳圓參拾錢

著作者 正木不如丘

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田利彦

東京市神田區松下町七番地

印刷者 佐藤磨

東京市神田區松下町七番地

印刷所 明治印刷株式會社

發行所 東京日本橋通 春陽堂

振替東京一六一七番  
電話大手局五一番

正木不如丘著

三太郎

金貳圓貳拾錢  
送料十二錢

診療簿餘白

金貳圓  
送料十二錢

三十前

金貳圓  
送料十二錢

法醫學教室

金貳圓貳拾錢  
送料十二錢

とかげの尾

金貳圓貳拾錢  
送料十二錢

東京帝國大學佛文科教授 辰野隆  
東京帝國大學佛文科講師 豐島與志雄  
東京帝國大學佛文科講師 鈴木信太郎 纂輯

全四十五卷  
五十五册

# フランス文學の叢書

「佛蘭西文學の叢書」發刊に就て

一國の文學が外國の文學の影響を受けること、受けた文學の内容が豊富になつて、却つて外國の文學に、逆に影響を及ぼすやうになる事がある。そして、受たり與へたりしてゐるうちに、愈々其國の文學の眞價を發揮して來る。佛蘭西のが、先づさう云ふ文學である。佛蘭西文學は、十六世紀から十七世紀にかけて伊西の文學の影響を、十八世紀から十九世紀にかけては英、獨の文學の影響を受けた。現代でも露西亞やスカンデナヴィヤの文學の良好刺激を受けてゐる。而して源には希臘羅馬の文學が在つて、今でも、その藥は利いてゐる。つまり、佛蘭西文學は文學の銀行のやうなものである。諸國の文學を預つて、活用して、

自國の文學を豊富にしてから、預つた文學に利子を附けて返してやる。旨い事をやつてゐると思ふ。で、唯、旨い事を見てゐるばかりが能でもないから、私達も、そいつをやつて見たらどうだらう。幸ひ佛蘭西語が少し讀めるので、讀める佛蘭西の文學をぼつり／＼譯して、氣永に續けて行つたら、孫の孫の時代あたりには相當に旨い實が結ぶかも知れない。その「かも知れない」點に希望をつなぐところが、文學など好む、親不孝な奴等の癖で、實業に對して斯う云ふのを虚業までも云ふのだらう。空腹にして高心の私達の仕事にはふさはしいと思ふ。

ロスタンに據ると、シラノ・ド・ベルジュラックは將に死なんとして、「俺の生涯は人に糧を與へて、自らは忘れられる生涯なのだ。……俺は墓の入口に立つて敢へて承認するモリエールは天才にしてクリスチヤンは美男なりき、」と云ふ。なまじ偉大な、異形な鼻に似合つた旺んな氣焰を吐いてゐる。然し私達はそれ程、大それた鼻を持せてゐないから、シラノのやうに見得を切つて、奮張つて見せる必要もない。氣取らずに、威張らずに、「アベラアルは坊主にして、エロイイズは女なりき」と云つた程度で、すなほに、正直に佛蘭西文學を傳へ度いのである。それが將來の日本の文學の爲に少しでも役に立てば例の「かも知れない」希望が實現せられるわけである。では徐ろ／＼始めやうか。と云ふのが本叢書の主旨と云はば主旨だらう。

第一卷 田ラベ・ブレザオ男 利ザオ男 譯 マノン・レスコオ 送料圓六拾錢

|      |        |        |    |    |    |    |    |   |   |   |
|------|--------|--------|----|----|----|----|----|---|---|---|
| 第十二卷 | 永サ小ミ萩サ | 石メ石メ永グ | 江ユ | 須コ | 江セ | 岡シ | 譯ス | コ | リ | ヌ |
| 第十一卷 | 戸松ユノ原ア | 川リ     | 川リ | 川リ | 川リ | 川リ | 川リ | コ | リ | ヌ |
| 第十卷  | 俊      | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第九卷  | 雄ド     | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第八卷  | 清セ     | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第七卷  | 生グ     | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第六卷  | 作      | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第五卷  | 作      | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第四卷  | 作      | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第三卷  | 作      | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |
| 第二卷  | 作      | 剛メ     | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | 剛メ | コ | リ | ヌ |

彼世紀女の告白 彼慾

送料圓十八十錢

|          |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 第卅四卷     | 第卅三卷   | 第卅二卷   | 第卅一卷   | 第卅卷    | 第廿九卷   | 第廿八卷   | 第廿七卷   | 第廿六卷   | 第廿五卷   | 第廿四卷   |
| 水フ石フ岡フ岸フ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ | 山ユ山ユ渡リ |
| 野ラ川ラ     | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   | 野ラ川ラ   |
| 成ン       | 成ン     | 成ン     | 成ン     | 成ン     | 成ン     | 成ン     | 成ン     | 成ン     | 成ン     | 成ン     |
| 夫ス       | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     | 夫ス     |
| 譯作       | 譯作     | 譯作     | 譯作     | 譯作     | 譯作     | 譯作     | 譯作     | 譯作     | 譯作     | 譯作     |

幼年少年時代の思出

レ・ディアボリツク

ド・ミ・ニツク

フ・イ・ロ・メ・エ

未・來・の・イ

ア・ル・ブ・ウ

大・伽・藍

鳥料理レエヌ・ヘドオク

エス・ボナアルの罪

赤い百の島

ベ・ン・ギ・ン

送金 送壹  
料 料圓  
十貳 十八  
二 二十  
錢圓 錢錢

|      |      |      |     |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|
| 第廿三卷 | 第廿二卷 | 第廿一卷 | 第廿卷 | 第十九卷 | 第十八卷 | 第十七卷 | 第十六卷 | 第十五卷 | 第十四卷 | 第十三卷 |
| 小ホオ  | 高モ   | 櫻ド   | 水フ  | 水フ   | 飯バ   | 永バ   | 山バ   | 高ゴ   | 森ス   | 草ネ   |
| 方ド   | 橋オ   | 田オ   | 谷オ  | 野ザ   | 島ザ   | 月ザ   | 田ザ   | 橋オ   | タ    | 野    |
| 又レ   | 邦ッ   | オ    | オ   | ツ    | ツ    | ツ    | ツ    | 邦テ   | 武    | ダ    |
| 星ル   | 耶ン   | 佐テ   | 三ル  | 亮ク   | 正ク   | 雄ク   | 樹ク   | 耶エ   | 彦ル   | 之    |
| 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作  | 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作   |

散文詩

女風車小屋からの手紙

ブルヴァアルとベキエ

バルザツク短篇集

從弟の親爺

放蕩の皮

カピテエヌ・フラツカス

ハルムとの僧院

夢と命

|        |       |       |       |       |      |      |      |      |      |      |
|--------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|
| 第四十五卷  | 第四十四卷 | 第四十三卷 | 第四十二卷 | 第四十一卷 | 第四十卷 | 第卅九卷 | 第卅八卷 | 第卅七卷 | 第卅六卷 | 第卅五卷 |
| 鈴木木信太郎 | 岸田國士  | 村上美都子 | 萩原厚   | 須川彌   | 矢野日源 | 萩原厚  | 井原清  | 岡野か  | 木村太郎 | 津浦未宗 |
| 譯作     | 譯作    | 譯作    | 譯作    | 譯作    | 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作   | 譯作   |

噓 ザリイヌ  
 或る小間使の日記  
 王家の人々  
 妖婦クリシス  
 ド・ブレオ氏の色懺悔  
 戀の怖れ  
 乙女の短篇集  
 プレヴオ短篇集  
 葡萄畑の葡萄作り  
 近代フランス小説集

送金料 十貳  
 送壹料 五十八  
 送壹料 十七

終

